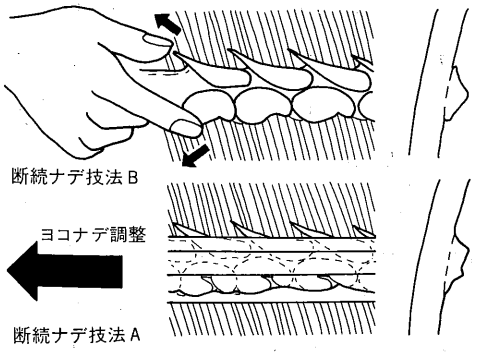
Ⅳ．埴輪の生産と供給

A．「断続ナデ技法」の再評価

「断続ナデ技法」は川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」で命名され、第Ⅴ期の埴輪の中でも新しい一群に見られる技法とされた。その後「断続ナデ技法」については分布等からの研究が進められてきたが、その技術的評価は簡略化として捉えられてきた。今回菅原東遺跡出土の埴輪において、「断続ナデ技法」の突帯の上に二次的な調整を加える技法が見い出された。そこで「断続ナデ技法」について改めて検討を加えてみたい。

「断続ナデ技法」について　まず「断続ナデ技法」の手法を記す[5]。最初に突帯となる粘土紐を器壁に廻し、粘土紐の下部を右手の人差し指で左下がりに、上部を右手の親指で左上がりにナデつける（第７図上）。これを時計まわりに続ける。つまり正立状態の埴輪に右手で粘土紐を手前にナデつけていく。下部をナデつけた後上部をナデつけていることから、下部を一周ナデつけた後、上部をナデつけた場合と、下部と上部とを交互にナデつけて一周させる場合が考えられる。突帯の下部にはナデつけられた粘土が左下方へ押し出されて、次のナデとの間に高まりが残される。上部には左上がりの先細りのナデつけた痕跡が一定間隔で続く。そして上部をナデつけるときに親指の側面を器壁に対して立てると、爪によりヘラで刻んだような圧痕が生じる。この「断続ナデ技法」は最下段の突帯にのみ残っているのが特徴である（写真[6]１）。

次に菅原東遺跡出土埴輪では、先に記したように、突帯はすべてヨコナデ調整で仕上げられている。突帯の下部には団子状の凹凸が続き（写真４）、中にはその凹部にヨコナデが及ばず、それ以前のナデつけた痕跡が見られるものもある（写真３）。この凹凸の高い部分はやや左側に膨らみを持ち、この部分は器壁に密着していないものが多い。突帯上部には左上がりの圧痕や擦痕が一定間隔で認められる。重複関係からタテハケを施した後でヨコナデ調整以前のものとわかる（写真２）。



第７図　断続ナデ技法模式図

これらの特徴は突帯の凸面のヨコナデの強弱によって若干の形が変化する。以上のことより突帯上部の圧痕と下部の凹みはそれぞれ「断続ナデ技法」の上下のナデつけた痕跡に対応するものであることが明らかである。上記の突帯は「断続ナデ技法」を持つ埴輪の２段目以上の突帯にも認められることから、「断続ナデ技法」は各段の突帯すべてに施されていることがわかる。

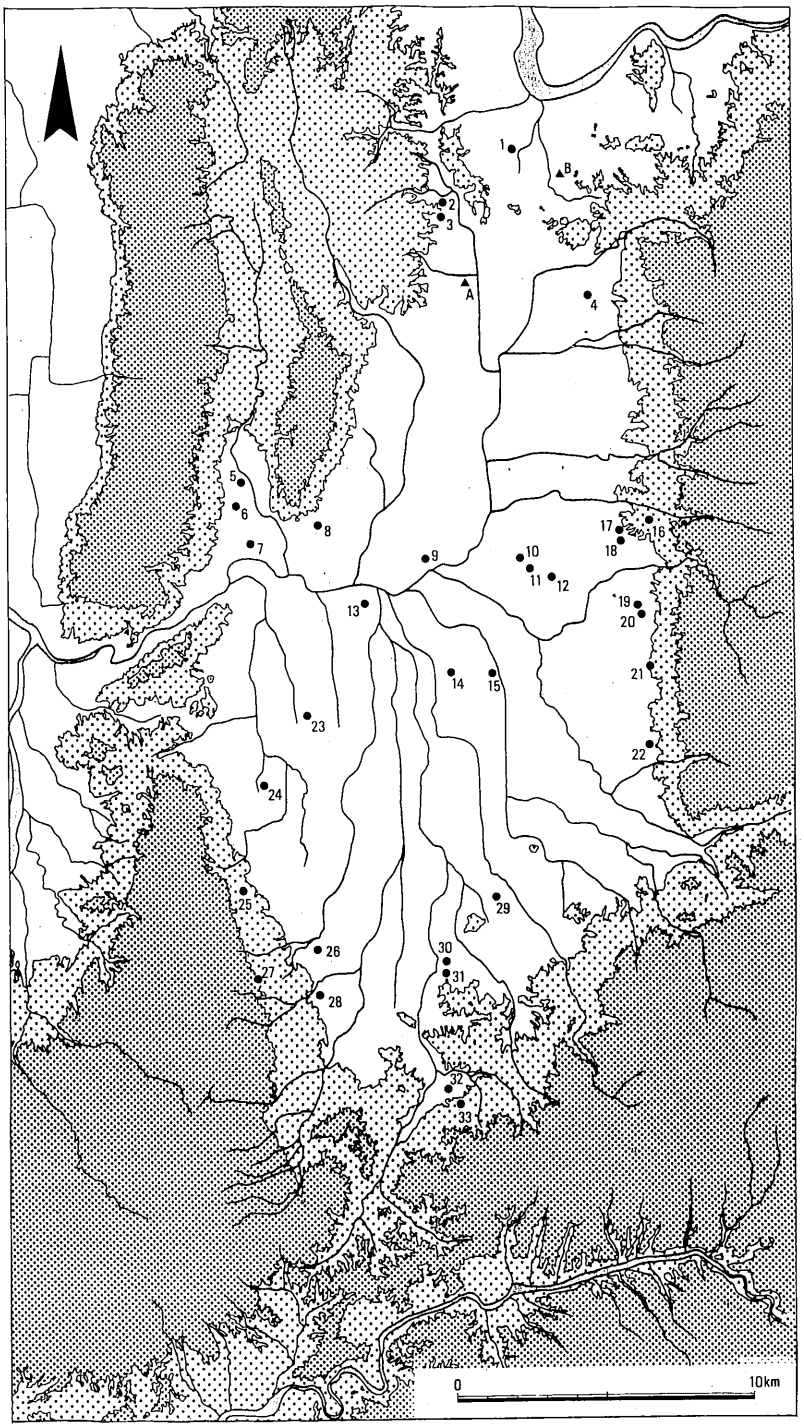
つまり従来「断続ナデ技法」と称されてきたものは、突帯の調整技法ではなく、粘土紐を器壁に

密着させ突帯の基本形を作る突帯成形技法と言える。菅原東遺跡出土埴輪で確認したように「断続ナデ技法」によって貼付した粘土紐をヨコナデ調整で形を整えることが本来の製作工程であった。そこでこの突帯貼付技法を断続ナデ技法A、従来の「断続ナデ技法」を断続ナデ技法Bとし、両者を総称して断続ナデ技法と呼ぶこととしたい。突帯貼付に際して断続ナデ技法を採用した理由については、推測の域をでないが突帯の剝落防止のためではないかと考えられる。第Ⅳ期以前の埴輪には突帯の剝落する例が多く認められる[7]。これは突帯貼付時に器壁の乾燥がある程度進んでおり突帯粘土紐との密着が悪いためと考えられる。その対応策の一つとして断続ナデ技法があり、もう一つが小工程ごとの突帯貼付であったと想定される。

出現と分布　断続ナデ技法Bの分布については弘田和司氏の集成[8]があり、それによると奈良県では3例が知られている。これに断続ナデ技法Aを加えると現在確認できるものだけで21例となる。これらの埴輪は、突帯間の幅に規格性が認められない点で菅原東遺跡と同様の状況である。このように断続ナデ技法は大和盆地の中でもかなり多く存在していることが認められる。奈良県外の分布については十分判明していないが、実見したものでは京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳[9]、滋賀県坂田郡近江町狐塚5号墳[10]、福井県遠敷郡上中町下船塚古墳等[11]が、また図面より京都府綾部市野崎1号墳[12]、岡山県赤磐郡山陽町岩田1号墳[13]、茨城県勝田市馬渡埴輪窯跡群[14]で確認できる。これらの地域は今まで断続ナデ技法の存在が知られなかった地域であり、今後の資料の増加によっては第Ⅴ期の埴輪の動向、地域性等を大きく変動させるものと考えられる。ここでは奈良県内に限ってその動向を追ってみるが、全国規模の動向については今暫らく資料の増加を待ちたい。

次にその出現時期について検討を加える。現在のところ断続ナデ技法Bの出現は、従来の研究どおりMT15[15]を遡る例が確認されていないが、より古い例で断続ナデ技法Aの存在が確認できる。奈良県新庄町寺口忍海D－27号墳、橿原市四条古墳（人物の台部のみ）、大阪府藤井寺市青山2号墳[16]、羽曳野市軽里4号墳[17]、京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳で、B種ヨコハケと供伴する例が多い。これらの古墳の築造年代から考えて、TK23～TK47の時期[18]には出現するものと考えられる。共伴するB種ヨコハケの埴輪とは突帯数、胎土、技法等より明らかに製作者集団を異にする例[19]や、断続ナデ技法Aのみで埴輪が構成される例[20]があることから、断続ナデ技法は出現時期にはある程度組織化された製作者集団の中で採用されていたことがうかがえよう。それは当時の大型古墳の集中、最も古い断続ナデ技法の存在等より古市古墳群中において出現した可能性が高い。

断続ナデ技法の評価について　以上述べてきたことをまとめ、断続ナデ技法を第Ⅴ期の埴輪の中で位置付けると以下のようになる。第Ⅴ期の埴輪は突帯設定の厳密な規格の消滅と、突帯間に施されるB種ヨコハケの放棄によって、その製作技法に断続ナデ技法と突帯貼付を含めた小工程の出現という大きな変革をもたらした。それらは埴輪の焼成において突帯の剝落による失敗を減らすこととなり、第Ⅴ期には断続ナデ技法は畿内において広く採用されることとなった。これらの変化が第Ⅴ期の埴輪の成立のメルクマールと言えよう。　（中島和彦）



第8図　大和盆地における第Ⅴ期埴輪出土古墳分布図

地域	番号	古墳名	墳形	規模(m)	所在地	突帯数	断続ナデ A	断続ナデ B	出土形象埴輪	備考
北部	1	音乗谷古墳	円墳?	21.4	精華町	4条以上			蓋、盾、石見、人物、馬、靫、猪、翳	横穴式石室?
	2	奈良少年院古墳			奈良市	4条以上	×	×	蓋、盾、石見、大刀	
	3	秋篠西山1号墳	方墳?	約10	〃			×	家、盾、襠	木棺直葬?
	3	〃 2号墳	円墳?	約10	〃			×		
	4	率川古墳	円墳?	10～	〃	4条以上	○	×	蓋、石見、猪?	
西北部	5	上山1号墳	前方後円墳	35	平群町	3条	○	×	家、蓋、馬	木棺直葬?TK47?
	6	烏土塚古墳	前方後円墳	60.5	〃				家、人物、靫	
	7	勢野茶臼山古墳	前方後円墳	40?	三郷町				家、蓋、盾、人物、大刀	
中央部	8	藤ノ木古墳	円墳	48	斑鳩町		○	×	盾?	横穴式石室 TK43
	9	額田部南方古墳	円墳	約20	大和郡山市				蓋	
	10	星塚1号墳	前方後円墳	36	天理町	3条以上	○	×	蓋、石見、鳥?	
	10	〃 2号墳	前方後円墳	39～41	〃	4条以上	○	×	家、蓋、鷹、獣足	横穴式石室
	11	荒蒔古墳	前方後円墳	約30	〃	7・6・4条	○	×	家、蓋、盾、石見、人物、鶏、鳥、馬、大刀、猪、翳	
	12	岩室池古墳	前方後円墳	45～55	〃	5・4・3条	○	×	家、蓋、石見、人物、馬、靫	
	13	河合城山古墳	前方後円墳	109	河合町		○	×		
	14	黒田大塚古墳	前方後円墳	70	田原本町	4条以上	○	×	蓋	木製品(笠、鳥)
	15	石見遺跡	前方後円墳(?)	約35～	三宅町	4・3条	○	○	家、蓋、石見、人物、馬、鹿、靫	木製品(笠、鳥)
東部	16	ウワナリ塚古墳	前方後円墳	110	天理市		○	×		
	17	別所大塚古墳	前方後円墳	125	〃					
	18	袋塚古墳	前方後円墳	約50	〃	4条	○	×	家、盾	
	19	小墓古墳	前方後円墳	約85	〃	4条以上	○	○	家、蓋、盾、人物、鶏、水鳥、馬、靫、鹿	木製品(笠、盾、刀、翳、他)
	20	西乗鞍古墳	前方後円墳	128	〃			×		
	21	西山塚古墳	前方後円墳	114	〃					
東南部	21	珠城山3号墳	前方後円墳	47.5	桜井市	3条	○	×	盾	横穴式石室
西南部	23	牧野古墳	円墳	60	広陵町	3条以上	○	×	家、盾、人物、動物	横穴式石室 TK43
	24	狐井城山古墳	前方後円墳	140	香芝市		○			
	25	芝塚1号墳	前方後円墳	50	当麻町					
	25	〃 2号墳	円墳	30	〃			○	家	横穴式石室 MT15
	26	伝飯豊陵古墳	前方後円墳	85	新庄町	4条以上	○	○	人物?	
	27	寺口忍海D-27号墳	円墳	16.5	〃	3・4条	○	×	家、蓋、人物、馬、靫、大刀、牛	ヨコハケ使用、横穴式石室 TK47
	27	〃 H-19号墳	円墳	13	〃	2条以上	×	×	家	ヨコハケ使用、横穴式石室、TK43
	28	石光山8号墳	前方後円墳	35	御所市	3条以上	?	×		竪穴式石室、木棺直葬
	28	〃 17号墳	前方後円墳	25	〃	3条	○	×		木棺直葬 MT15?
	28	〃 20号墳	円墳	14	〃		×	×		木棺直葬 TK10?
南部	29	四条古墳	方墳	29	橿原市	3条以上	○(形象)	×	家、蓋、盾、人物、鶏、馬、靫、鹿、犬	ヨコハケ使用(C種) TK23～MT15、木製品(笠、石見)
	30	新沢166号墳	円墳	約31.6	〃	2条	×	×	家、鶏、	ヨコハケ使用、木棺直葬、TK47
	30	〃 175号墳	円墳	16.5	〃	3条	×	×		木棺直葬 MT15?
	31	伝宣化陵古墳	前方後円墳	138	〃					
	32	市尾墓山古墳	前方後円墳	66	高取町	6・5条	○	○	蓋、盾、	横穴式石室、MT15、木製品(笠)
	33	イノヲク5号墳	円墳	16	〃		×	×	盾(?)	ヨコハケ使用、黒斑あり 木棺直葬 TK47
	33	〃 6号墳	円墳	16.5	〃					ヨコハケ使用、黒斑あり 木棺直葬、
	A	菅原東埴輪窯跡群			奈良市	3・4・6条	○	×	家、蓋、盾、石見、人物、水鳥、馬、靫	ヨコハケ一部使用 MT15～TK43
	B	上人ヶ平埴輪窯跡群			木津町	3条以上	×	×	家、蓋、盾、鶏、馬、甲冑	Ⅳ～Ⅴ期

表2　大和盆地における第Ⅴ期埴輪出土古墳一覧表(番号は分布図に対応)

参　考　文　献

『奈良山　平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』　奈良県教育委員会　1973

『奈良市史（考古編）』1968

「秋篠西山古墳群」『奈良県遺跡調査概報　1984年度』　奈良県立橿原考古学研究所　1985

同上

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和61年度』　奈良市教育委員会　1987

「廿日山遺跡群調査説明資料」『奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』　奈良県市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会　1991

『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊　奈良県教育委員会　1972

『勢野茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊　奈良県教育委員会　1966

『斑鳩藤の木古墳　第一次調査報告書』　斑鳩町教育委員会　1990

未報告

『星塚・小路遺路の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第４集　天理市教育委員会　1990

同上

『大和を掘る　1988年度発掘調査速報展Ⅸ』　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1989

『岩室池古墳・平等坊、岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第２集　天理市教育委員会　1985

「北葛城郡河合村大塚山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12輯　奈良県教育委員会　1859

「黒田大塚古墳第一次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要２』　田原本町教育委員会　1984

『大和考古資料目録　石見遺跡資料　第15集』　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　1988

『天理市石上・豊田古墳群Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第27集　奈良県立橿原考古学研究所　1976

同上

『天理市埋蔵文化財調査概報　昭和60年度』　天理市教育委員会　1986

『天理市埋蔵文化財調査概報　昭和61・62年度』　天理市教育委員会　1988

「西乗鞍古墳南遺跡」『奈良県遺跡調査概報　1981年度』奈良県立橿原考古学研究所　1982

『磯城・磐余の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊　奈良県教育委員会　1981

「大三輪町穴師珠城山二号・三号墳」『奈良県文化財調査報告』第三集　奈良県教育委員会　1960

『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第一集　広陵町教育委員会　1987

「狐井城山古墳外堤　第３次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1983年度』　奈良県立橿原考古学研究所　1984

「芝塚古墳群」『奈良県遺跡調査概報　1985年度』　奈良県立橿原考古学研究所　1986

同上

「埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第31号　宮内庁書陵部　1979

『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第１冊　新庄町教育委員会　1988

同上

『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　奈良県教育委員会　1976

同上

同上

「四条古墳」『奈良県遺跡調査概報　1987年度』　奈良県立橿原考古学研究所　1988

『史跡新沢千塚古墳群保存整備報告』　橿原市教育委員会　1988

『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊　奈良県教育委員会　1981

「宣化天皇陵外堤漏水防止工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第29号　宮内庁書陵部　1977

『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第５冊　高取町教育委員会　1984

『イノヲク古墳群　第２次発掘調査報告』高取町文化財調査報告第10冊　高取町教育委員会　1990

同上

『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』　奈良市教育委員会　1992

「上人ヶ平１号埴輪窯」『京都府遺跡調査概報』第35冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1986

B．大和における円筒埴輪の地域性

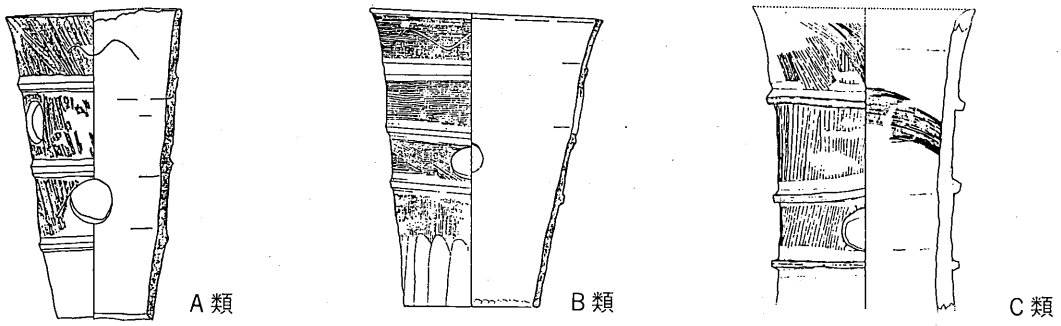
（ｉ）円筒埴輪の分類

大和における川西編年第Ｖ期の円筒埴輪を通観すると、現状で大きく３つに分類できる。（第９図）

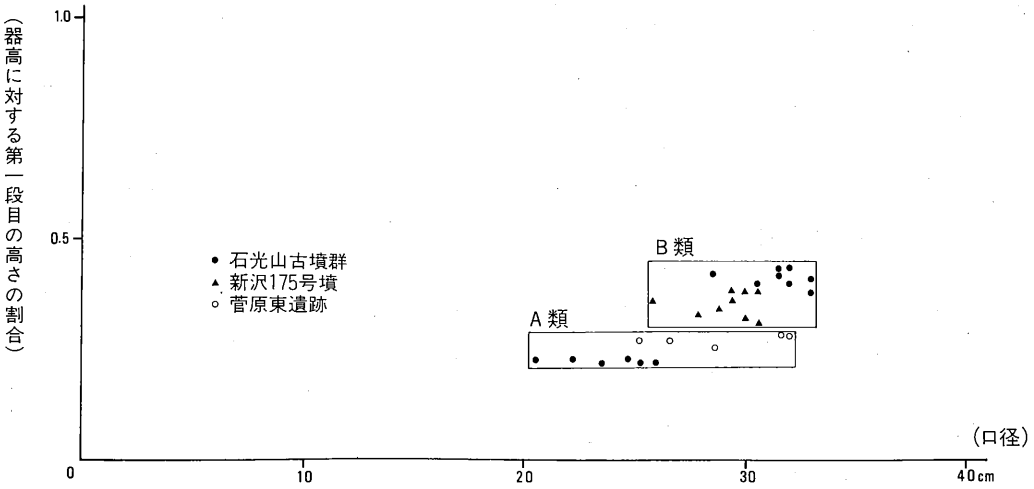
Ａ類は、突帯を断続ナデ技法で貼付するものを主体とし、技法Ａが多いが、大和中、南部では技法Ｂもみられる。突帯は、各段の幅がほぼ均等になるように貼付される。外面がタテハケ調整のものに加えて、ユビナデ調整のものもある。底部調整は、板による押圧が多くみられる。焼成堅致で須恵質のものはＡ類に多い。菅原東遺跡で生産されていた円筒埴輪はＡ類に属する。

Ｂ類は、突帯貼付に際して断続ナデ技法を用いない。第１段目が上の各段に比べて高いことと、外面にヨコハケ調整がみられることが特徴である。器高に対する第１段目の高さの割合が３割を越え、Ａ類と比較しても第１段目を高く製作していることがわかる。ヨコハケには、静止痕のないものもみられる。口縁部は、ヨコナデにより内側に肥厚するものが多い。底部調整は、板による押圧の他にヨコナデも多用される。青く須恵質に焼成されたものは確認できない。

Ｃ類は、Ａ類に比べて大型で器壁も厚い。突帯は断続ナデ技法を用いず強くヨコナデしており、



石光山17号墳　　石光山41号墳埋葬施設2（円筒棺）　　牧野古墳



第９図　円筒埴輪の分類

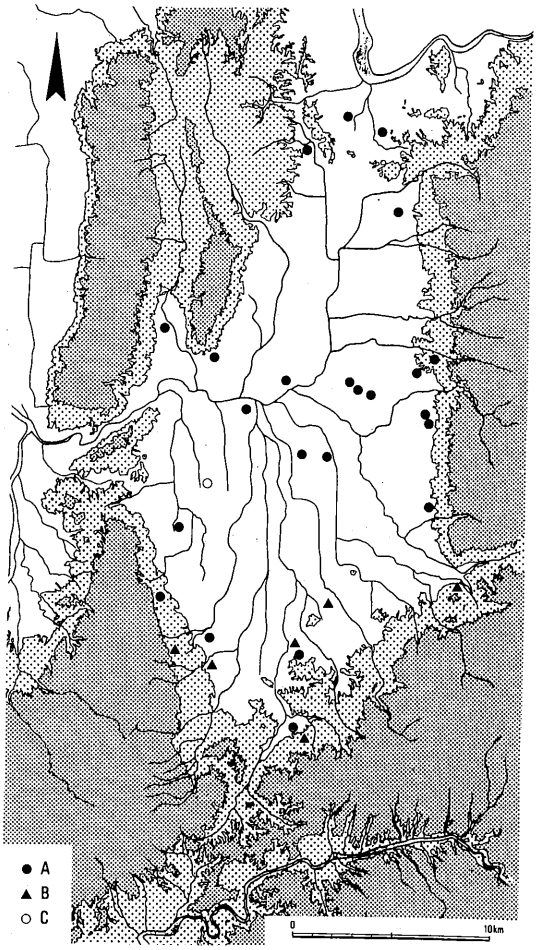
突出するものが多い。底部調整はみられないようである。

（ii）円筒埴輪の地域性

Ａ類は大和盆地全域に分布するが北、中部に多く、逆にＢ類は大和南部に分布が限られる。Ｃ類は現在のところ牧野古墳でしか確認しておらず、その広がりは不明である。(第10図)

Ｂ類の北限は現状で四条古墳であり、ここから出土した人物埴輪の脚台底部にめぐる突帯は、Ａ類の特徴である断続ナデ技法Ａによって貼付されている。したがって、四条古墳に配置された円筒埴輪と形象埴輪はそれぞれ異なった製作者集団内でつくられて運び込まれた可能性が高い。

また、Ａ類は低地の古墳に多く採用されているのに対して、Ｂ類は丘陵上の古墳群に採用されている例が多い。これは大和南部が山がちであることとも無関係ではあるまい。しかし、伝宣化陵古墳（Ａ類）と新沢千塚古墳群（Ｂ類）、市尾墓山古墳（Ａ類）とイノヲク古墳群（Ｂ類）での埴輪の相違は単に地理的問題だけでは片付けられない。さらに、同じ古墳群の中でＡ、Ｂ類が採用されている場合がある。石光山古墳群では、前方後円墳である８号墳（全長約35ｍ）、17号墳（全長約25ｍ）に円筒埴輪Ａ類が樹立され、Ｂ類は円墳の20号墳(径14ｍ)に樹立が認められる。また、寺口忍海古墳群では、方形の張り出し部を付設した円墳で古墳群内最大級の規模をもつＤ－27号墳(直径約16.5ｍ)にＡ類の樹立が認められ、Ｂ類は円墳のＨ－19号墳（直径約13ｍ）に樹立されていた。古墳群内における円筒埴輪樹立古墳の築造時期差も考慮しておく必要があるが、Ａ、Ｂ類が同時期に存在している事実からすれば、その採用にあたって何らかの意志が働いていたものと考えられよう。したがって、Ｂ類を樹立する古墳に対してＡ類を樹立する古墳の方が、墳形や規模の点からみて階層的に優位な傾向を大和南部において看取できる。このことは、Ｂ類が３条突帯及び２条突帯の小型品に限られ、Ａ類が３条突帯から７条突帯までの小型品から大型品を含むここと関連する。円筒埴輪の序列化という点で考えれば、Ｂ類はＡ類よりも相対的に下位に位置づけられるのであり、Ｂ類の分布の偏在はこれを示唆するものと考えられる。



第10図　大和盆地における円筒埴輪の地域性

（iii）周辺地域との関連

それでは、大和周辺地域の円筒埴輪との関連はどうであろうか。

紀伊における６世紀代の円筒埴輪については、河内一浩氏の論考がある[21]。これによると、当該期の円筒埴輪は「畿内型」と「紀伊型」の２つに大きく分類される。そして、「断続ナデ技法を有する円筒形埴輪は、畿内型の埴輪に限られ、紀伊型の埴輪には今のところ断続ナデ技法は認められない」としている[22]。このような諸特徴からみて、「畿内型」が大和Ａ類、「紀伊型」が大和Ｂ類に対応することは間違いないものと考えられる。Ａ、Ｂ類が併存している大和南部は紀伊と接し、両地域の交流の深さを知ることができよう。また、紀伊では川西編年第Ⅳ期に淡輪技法と称される特殊な底部調整が施された円筒埴輪が盛行するが、これは紀伊型埴輪につながるものと考え難い。現状では、紀伊型埴輪は大和Ｂ類と系統的につながる可能性が高く、「紀伊型」という名称については再考する必要があろう。このことから考えて、紀伊では６世紀において埴輪生産の独自性は保ち得なかったものと推測される。

大和Ｂ類と類似した円筒埴輪が紀伊以外にも認められる。滋賀県野洲郡中主町御明田古墳群１号墳出土の円筒埴輪[10]は、Ｂ類の諸特徴を有するが、中でも口縁部外面に波形のヘラ描きがあり注意をひく。奈良県石光山古墳群、四条古墳、和歌山県日高郡川辺町箱谷３号墳で同様の波形のヘラ描きが認められ、そのつながりや意義の解明が今後の課題となっている。

また、伊勢の円筒埴輪についても、第１段目が高く外面ヨコハケ調整の小型品が存在し、底部調整が異なるものの大和Ｂ類との共通点がみられ注目しておく必要があろう。

大和Ａ類と同形態の円筒埴輪は、断続ナデ技法の分布から明らかなように、畿内に広く分布しその主体となっている。したがって、大和Ａ類は畿内型埴輪と考えることができよう。しかし、これとは対称的に、大和Ｂ類系の埴輪は畿内の東、南側に環状に分布している。そこで想起されるのが、近年の研究成果により明らかにされつつある尾張型埴輪[23]の存在である。尾張を中心として分布する須恵器系埴輪がこれにあたり、外面調整には「回転ヨコハケ」が用いられる。尾張型埴輪の中でも２条突帯の小型品に大和Ｂ類との共通点がみられるようである。「畿内型」と「尾張型」の分布範囲の中間に大和Ｂ類系の埴輪が分布することから考えても、大和Ｂ類の存在意義は尾張型埴輪との関連で択えていく必要があろう。

さて、大和Ｃ類についても言及しておきたい。大和では今のところ特異な存在であり、牧野古墳１例にすぎないが、類似した特徴を有する埴輪が大阪府堺市日置荘遺跡石池谷地区で調査された埴輪窯跡から多数出土している[24]。供給先が判明していないのが残念ではあるが、大型で器壁が厚く突出する突帯を有する点や底部調整がみられない点など共通する部分が多い。埴輪の焼成時期は６世紀中頃からあまり下らない頃と想定されており、埴輪生産も終末に近づいた時期にこのような埴輪が畿内の南部でみられることは、非常に興味深い現象である。

（鐘方正樹）

C．菅原東遺跡埴輪窯跡群の歴史的意義

（ｉ）供給範囲の推定

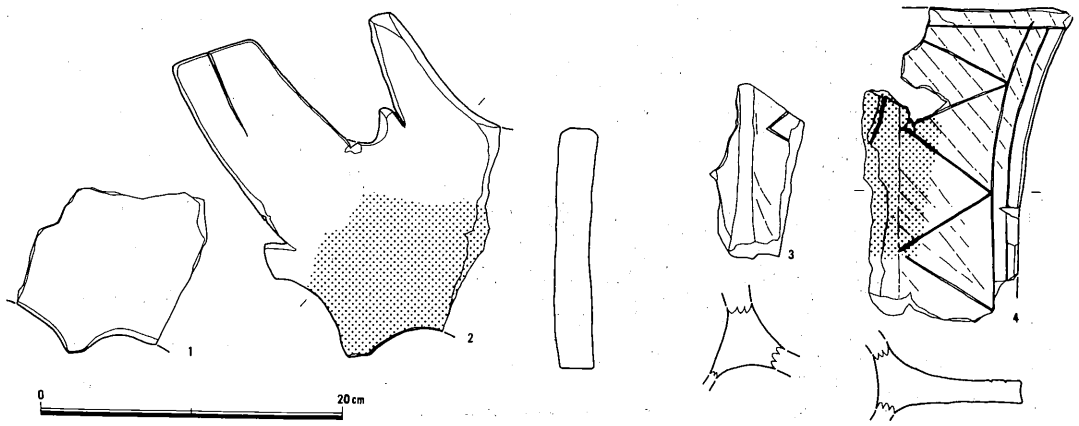
今回、大和盆地における第Ⅴ期の円筒埴輪を中心として、奈良教育大学の三辻利一氏に胎土の蛍光Ｘ線分析をお願いした。分析資料は23遺跡であり、資料収集にあたっては各市町村教育委員会及び奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会から多大な協力を得た。

分析の結果、埴輪の胎土がＳｒ量と比較してＲｂ量が多いもの（Ａ）と少ないもの（Ｂ）の２つに大きく分かれることが判明した。Ａは大和北部を中心に、Ｂは大和南部を中心にそれぞれ分布し、その接点となる大和中部ではＡ、Ｂ両者が混在している遺跡が２つみられた。菅原東遺跡の埴輪胎土はＡであることから、Ｂとの接点となる大和中部を越えて南部にまで埴輪が供給されていたとは考え難い。また、大和北部においては、第Ⅴ期の埴輪を有する古墳がほとんど確認されておらず、窯跡群の規模や生産量からみて近在地域への供給だけでは遺跡を理解できない。そこで、供給先の一つの候補として、近年第Ⅴ期の埴輪を伴う埋没古墳が多く確認されつつある大和中部（天理市周辺)が注目される。ここに位置する星塚１・２号墳出土の埴輪は、三辻氏の胎土分析結果では菅原東遺跡のものと一致し、奥田尚氏による胎土の肉眼的観察でもよく合致している。円筒埴輪はＡ類で製作技法も共通し、形象埴輪についても星塚１号墳で類似したものが確認できる(第11図)。現在のところ、これほど共通点が見い出せる資料は他になく、一つの供給先として星塚１・２号墳を最有力候補に挙げ得るであろう。今後の周辺での調査研究が期待される。

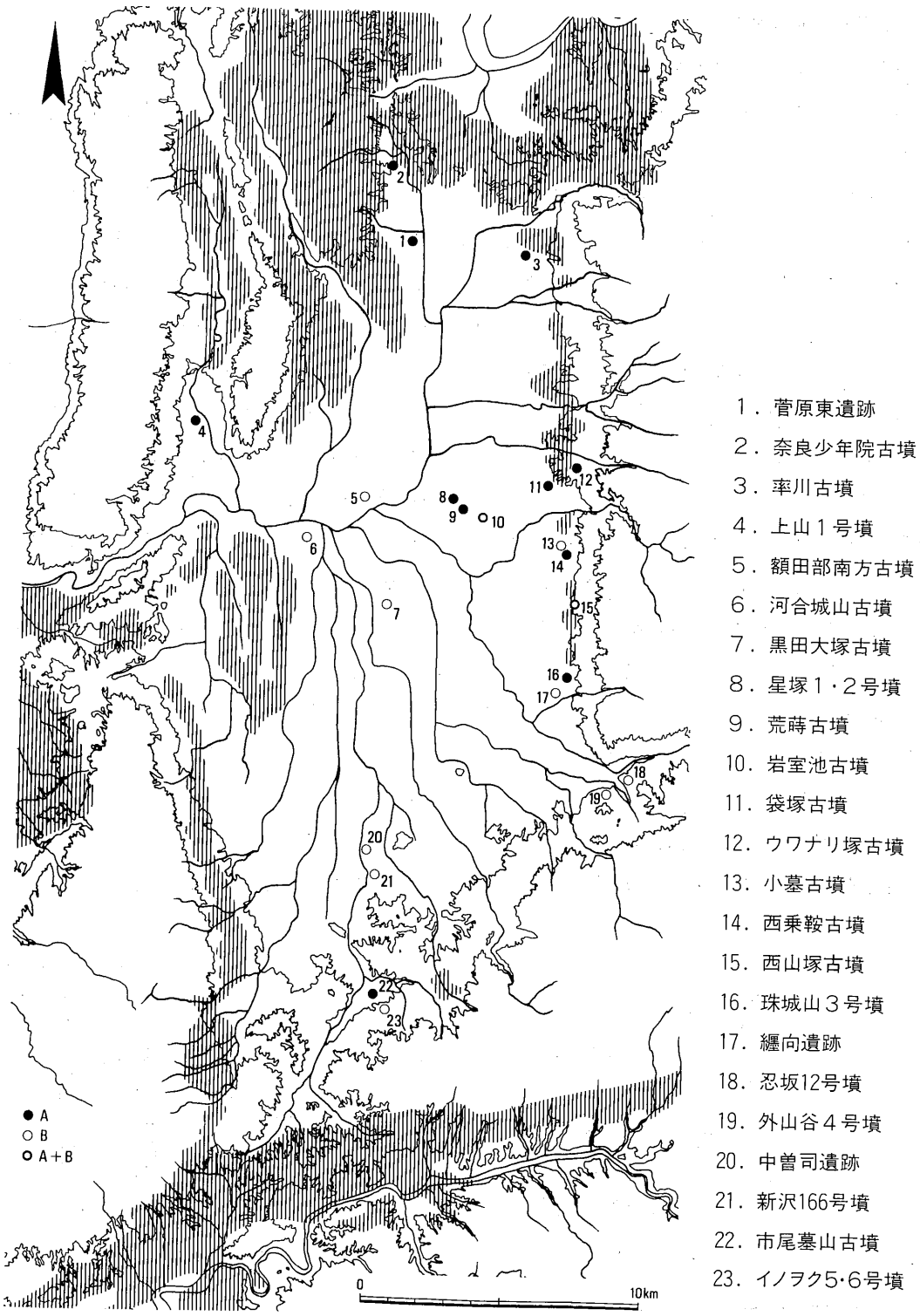
以上のように大和中部への埴輪の供給を考えた場合、埴輪の搬出方法が次に問題となるが、窯跡群の東側には秋篠川が南流しており、これを水運として利用すれば容易に埴輪を大和中部へ搬出できたものと考えられる。

（ii）生産体制（土師氏との関連）

菅原東遺跡から大和北・中部の古墳に埴輪が供給されていたとすれば、それはどのような生産体



第11図　菅原東遺跡と星塚１号墳の形象埴輪（１・３星塚１号墳、２・４菅原東遺跡）



第12図　胎土分析埴輪出土遺跡の分布（トーンは大阪層群）

制に基づいていたのであろうか。周辺に同時期の古墳群が確認できないことから、少なくとも古墳群造営に伴い現地に設けられた局地的な生産施設ではなかったものと考えられる。この点で、中期古墳群内もしくはそれに隣接して構築された埴輪窯とは性格を異にする。ここに、古墳時代中期から後期への過渡期における埴輪生産体制の変化が看取できよう。

菅原東遺跡の埴輪生産体制に言及する場合、それ以前に存在したであろう佐紀盾列古墳群での埴輪生産体制について考えておく必要がある。生産遺跡が未確認ではあるが、出土している埴輪について技法的にその変遷がたどれることから、古墳群造営に伴う安定した埴輪生産集団の存在が想定される。そして、5世紀後半における古墳群の造営停止とともに、この埴輪生産集団は姿を変え、次いで出現するのが、菅原東遺跡の埴輪窯なのである。ここで円筒埴輪が製作され始めた段階では、B種ヨコハケのみられるものと、新しく断続ナデ技法を採用したものとが混在するが、それ以後急速に後者が主流を占めるようになる。このことから、古墳群専属の埴輪生産集団が、古墳群の造営停止に伴い再編成され、大和北・中部に埴輪を供給する拠点的存在として政治的に設けられた可能性が考えられる。

すなわち、断続ナデ技法が河内（古市古墳群内）で採用されると同時に、畿内主要地域にもこれが急速に広がり、それまでのB種ヨコハケに代表される中期的要素が駆逐される。そして、規制の緩和により地域色が顕在化し始める。これほど急激な技法の変革は、それ以前の技法変遷ではみられないものであり、定型化した石見型埴輪の出現とともに埴輪祭祀の画期として択えることができよう。そして、このような現象は、強大な政治的背景のもとに推進された古墳時代中期から後期への移行の一つの結果と考えられる。以上の観点からみて、断続ナデ技法の出現は円筒埴輪の変遷を考える上で一つの指標となるものであり、川西編年で言えば第Ⅳ期と第Ⅴ期を画する意義をもつ。

また、石見型埴輪もきわめて畿内色が強く、断続ナデ技法を有する円筒埴輪とともに畿内型埴輪と言うことができる。その分布は政治的な性格を反映しており、菅原東遺跡埴輪窯跡群は単なる地方窯ではなく、政権の内部組織に属する造墓集団と密接に関連した存在であったことを示唆する。このような造墓集団を土師氏と考えるならば、断続ナデ技法はまさに土師氏の技法であり、拠点的に再編成された埴輪生産集団を媒介として伝播したのではないかと推測される。このことから、菅原東遺跡は技法的にみても土師氏との密接な関連が想定できる。そして、この技法の存在からみて、堺市の土師遺跡とその周辺、羽曳野市の野々上埴輪窯跡とその周辺、奈良市の菅原東遺跡とその周辺（秋篠地域も含めて）が土師氏四腹に対応する可能性が考えられよう。

以上、菅原東遺跡埴輪窯跡群は考古学的にも土師氏との関連で理解することができ、文献史学との整合性をも確認し得た。また、古墳時代中期と後期の埴輪生産体制の違いを追求する上で非常に重要な遺跡であることを認識した。今後の調査研究の進展ならびに十分な遺跡の保全と活用が望まれる。

（鐘方正樹）

註

1） 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻２号 1978

2） 円筒埴輪の各部の名称は『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成３年度』奈良市教育委員会 1992を参照

3） これらは突帯設定のための割り付け線と考えられ、これらの存在しない菅原東遺跡の埴輪は突帯設定に際して、その位置等は厳密に意識されなかったものと考えられる。

4） 石見型埴輪の祖形ではないかと考えられている市尾今田２号墳出土例は、他に類例がなく、定型化以前のものとしてここでは扱わない。

5） 以下の記述は右利きの製作者が正立状態の円筒埴輪に向った状態を想定している。

6） 断続ナデ技法の写真は、天理市小墓古墳出土の埴輪を泉 武氏（天理市教育委員会）の御厚意により使用させていただいた。

7） 特に第Ⅳ期の埴輪に認められ、登窯導入による焼成技術の変化が大きな理由となっているものと考えられる。

8） 弘田和司 「埴輪」『物集女車塚古墳』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集 1988

9）「五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要」『宇治遺跡群Ⅰ』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第11集 宇治市教育委員会 1988

10）『断夫山古墳とその時代』第６回東海埋蔵文化財研究会 1989

11）『躍動する若狭の王者たち－前方後円墳の時代－』福井県立若狭歴史民俗資料館 1991

12） 小山雅人 「野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品」『京都府埋蔵文化財情報』第25号 1987

13）『岩田古墳群』山陽団地埋蔵文化財調査事務所 1976

14）『馬渡埴輪製作遺跡 Ｄ地区確認調査概報Ⅲ』勝田市教育委員会 1984

15） 田辺昭三 『須恵器大成』角川書店 1981

16）『古市古墳群 藤井寺の遺跡ガイドブックNo.１』藤井寺教育委員会 1986

17）「羽曳野市軽里所在 古市大溝跡現地説明会資料」羽曳野市教育委員会他 1991

18） 寺口忍海Ｄ－27号墳－ＴＫ47、四条古墳－ＴＫ47～ＭＴ15 青山２号墳－ＴＫ23（一瀬和夫氏の御教示による） 軽里４号墳－ＴＫ47 五ヶ庄二子塚古墳－ＴＫ47

19） タテハケの埴輪とヨコハケの埴輪との違いは五ヶ庄二子塚古墳においては胎土、突帯間の法量に、青山２号墳においては突帯数の違いに認められる。

20） 軽里４号墳において認められる。

21） 河内一浩 「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』 1988

22） 河内一浩 「埴輪をめぐる製作集団の動向」『考古学論集』 1990

23） 赤塚次郎 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 1991

24）『日置荘遺跡（その５）』大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター 1989